

Key
Person



(株)イサミ電設 代表取締役

田中 勇気

「闘病中の弟が社会復帰した時の受け皿となる場所を作りたい」——

それが田中社長が独立して『イサミ電設』を始めた理由だった。

残念ながらその弟は同社設立前に亡くなり、目的を果たすことはできなかったが、面倒見の良い社長は、その後つながりがあって入ってきた従業員たちをじっくり育て、皆と力を合わせて同社を発展させていった。

今後は組織の強化を図るため、現場に出る機会が少なくなることが予想されるが、現場とのコミュニケーションは欠かさないようにしたい、と笑う社長。

その面倒見の良さ、温かさで、社長は周囲との信頼を築き、同社を守り立てていく。

「たとえ現場に出る機会が少なくなったとしても、従業員とのコミュニケーションは欠かさないでいたい」



代表取締役

田中 勇気

大阪府門真市出身。学生時代より音楽に熱中し、バンド活動に励む。結婚を機に電気工事を手掛ける会社に入り、技術を身に付けた。2012年に独立後は着実に事業を軌道に乗せ、2016年に法人化を果たした。

COMPANY PROFILE



2012年に個人事業としてスタートし、2016年に法人化に至った『イサミ電設』。11年間電気工事業に従事してきた田中社長が、そのキャリアを活かして始めた電気工事会社だ。従業員想いの社長のもと、地道に営業活動や現場作業を行って顧客を開拓し、着実に事業を軌道に乗せてきた同社。本日はタレントのダンカン氏が、社長と、社長の弟である鈍田大悟氏にインタビューを行った。

闘病中の弟の社会復帰のため 新たな会社の設立を決意

——早速ですが、田中社長の歩みから伺います。

(田) 学生時代はバンド活動をしていて、学業修了後もプロを目指して頑張っていました。しかし、結婚することになり、家族を養うためには夢ばかり追ってはいられないと就職。義父が経営している電気工事会社で働きました。

——ほう。社長はそれまで電気工事のご経験はあったのですか。

(田) いいえ。全くの未経験でした。ただ、義父は普段は温厚なのですが仕事では厳しく、「自分で考えて仕事を覚える」というタイプ。いきなり現場に連れて行かれて、「これをやってくれ」と言わ

れ、当時は何をどうすれば良いか分からず戸惑いましたね。しかし、最初から厳しくされたことで、自覚を持って仕事にあたることができました。私の父が建設業の仕事をしており、昔から現場にはよく行っていたので、現場独特の雰囲気ですぐ馴染めたのも良かったのだと思います。そして11年ほど仕事をした後、独立。『イサミ電設』を始めました。

——お勤めになっていた当初から、いずれ独立をと考えておられたのですか。

(田) そうした考えはなかったですね。義父の会社には後継ぎである義兄がおり、私は性格的にリーダーを支えるのが性に合っているんで、ゆくゆくは義兄のサポート役を果たしていこうと考えていたのです。それが一転、独立することになったのは、ガンで闘病生活を送ってい

た2歳下の弟がいたから。私が会社を経営することで、弟が社会復帰した時の受け皿を作りたいと思ったのですよ。

——社長は温かな、優しい心をお持ちですね。弟さんも喜ばれたでしょう。

(田) それが、『イサミ電設』をスタートした時には、もう一人の弟である鈍田も加わったのですが、闘病していた弟の方は亡くなってしましまして……。ただ、たくさんの従業員を抱え、会社が順調に成長している今も、その弟も一緒に会社にいるという想いを持って、仕事を続けているのです。

「新しい人材」も積極的に入れ より強固な会社組織の構築を期す

——ところで、独立直後はどのようにお仕事を御得おられたのでしょうか。

(田) 門真市からは少し遠方になる池田市や吹田市まで足を伸ばし、片っ端から不動産業者さんなどに飛び込み営業をかけていました。そうして他所の電気工事業業者さんの応援をしながら受注先を開拓していき、少しずつ業績を伸ばしていったんですよ。そして3年ほど経つころか

頼り甲斐のある社長が牽引する 温かみ溢れる電気工事会社

Column

これまでは縁あって入ってきた人たちばかりだったが、今後はつながりのなかった人たちを積極的に雇用し、『イサミ電設』の組織をより強固にしていきたい、と語る田中社長。その際に重要になるのが人材育成だろう。社長は自身が考える育成のあるべき姿について、こう語る。「教える側は自分自身を基準にして高いハードルを求めがち。そしてできないと『今の若い世代は根性がない』となってしまう。しかし、それでは人は育っていきません」——最初は多少頼りなく見えても、仕事を任せ、責任を持たせる。それが自信となり、ひいては成長につながっていくと考えているのだ。従業員一人ひとりを尊重しつつも、強い自立心を養うこのやり方で、同社は今後も責任感のある従業員を育成していくことだろう。



インタビューには田中社長の弟の鈍田氏にも加わっていた

ら事業が軌道に乗っていきました。——弟の鈍田さんから見て、社長の仕事ぶりはいかがですか。

(鈍) 本当に頼り甲斐がありますね。私は前の会社で一時期一緒に働いていましたが、いつも助けになってくれた兄が独立するならば少しでも力になりたいと、付いていくことを決めたのです。

(田) 私たちの家では親が離婚し、兄弟三人だけで一緒に暮らしたこともあったんです。だから鈍田は弟というより、自分の子どものような感覚ですね。またその他の従業員たちも、仕事のことで悩んでいたため相談に乗った縁で入社するなど、つながりがあって来た人たちばかりで、とても近い存在なんですよ。

——まるで家族のような会社を築いていらっしゃるんですね！そしてその家族を、長兄的な存在の社長が力強く牽引し

て会社を成長させてこられた訳だ。

(田) いえいえ、ここまで成長できたのは、みんなが頑張ってくれたお陰ですよ(笑)。それに、皆が同じ価値観を持ち、同じ方向を向くのは必ずしも良いことではありません。それで今後は、全くつながりのなかった人たち、新しい人材をどんどん入れていって、会社組織としての基盤をより強固なものにしていきたいと思っています。

——今まさに、次なるステップに進む段階なのですね。今後はどのような展望を持っておられますか。

(鈍) 私は現場を任されていますが、最近営業も始めました。現場の仕事、現場の管理、営業と、オールマイティにこなせるようになり、夜遅くまで仕事をしている兄の負担を軽くしたいですね。そして会社を大きくして、どこにでも通用

する会社にしていきたいです。(田) ただ、会社が大きくなると、現場に出る機会も少なくなります。私は現場が好きですし、現場に顔を出して皆に声を掛け、コミュニケーションは欠かさないようにしたいですね。あと、今後は電気工事業の技術と経験、ノウハウを活かして異業種にも取り組んでいければと思っています。それでも、あくまで基本は電気工事業。こちらを蔑ろにせず良質な仕事を果たしていく所存です。

(取材 / 2017年6月)

After the Interview ダンカン

「田中社長はインタビューの最後に、自身が弟さんを亡くされていることから、『同じような境遇の人たちに何か役立つような活動もしていきたい』と語って下さいました。弟さんが亡くなったのはとても残念なことでしたが、その弟さんへの想いが、『イサミ電設』さんの温かな社風につながったと感じます。その社風をこれからも大切にしていっていただきたいですね」

